

# 日本の古典、**狂言 文楽の究極は「人を許す！」**です

2017年7月17日

## 喜怒哀楽を越え「人を許す！」と「自分が楽になる！」

狂言は対話を中心としたせりふ劇です。大がかりな舞台装置は一切用いず、言葉やしぐさによってすべてを表現します。狂言の大きな特徴は「笑い」。中世の庶民の日常や説話などを題材に、人間の習性や本質をすどく切り取って、大らかな「笑い」や「おかしみ」にしています。狂言の典型的なキャラクター「太郎冠者(たろうかじゃ)」を始め、様々な登場人物たちが織りなす物語。そこに描かれているのは現代にいたるまで変わらない、普遍的な人間の姿です。

狂言は中世を通じて、能と交互に同じ舞台で演じられてきました。歌舞を中心とした優美な象徴劇、能に対し、写実的な演技によって、滑稽に人間の姿を描く喜劇、狂言。両者は互いに切っても切り離せない関係を保っています。現在、能と合わせて2008年、ユネスコの「無形文化遺産」に登録され、歴史的な、また現代に生きる演劇としての価値が、国内外を問わず広く認められています。



奈良時代に中国から渡来した「散楽」(さんかく)が、日本化して平安時代に「猿楽」(さるかく)となり鎌倉時代を通して悲劇的な歌舞劇である「能」に対して、猿楽本来の笑いの要素がせりふ劇となり「狂言」が生まれます。そうして能との組合せによって発展し、中世庶民の間に滑稽・物真似の笑いをまき散らし、冗談や洒落を本位とすることなどにより笑いの度合いを次第に高め、洗練された芸能になります。室町時代の後期に大蔵流・和泉流・鷺流が成立します。幕府直属に大蔵流・鷺流、尾張徳川藩と宮中に和泉流が勤め、江戸の混乱期を経て鷺流は廃絶します。その後大正・昭和と時代の荒波をくぐりぬけ、現在は和泉流、大蔵流の二流が活動しています。

文楽は人形浄瑠璃を受け継いだ、日本の伝統的な人形劇の事を言います。

もともと、江戸時代後期に人形浄瑠璃を蘇らせた植村文楽軒[うへむらぶんらくけん]と言う人物が創った劇場の名前だったのですが、いつの間にか芸能そのものをさすようになり、現在では正式名称となっています。



### 一体の人形を三人で

文楽は、太夫[だゆう]・三味線・人形遣いの「三業[さんぎょう]」で成り立つ三位一体の演芸で、男性によって演じられます。客席の上手側に張りだした演奏用の場所を「床」と呼び、太夫と三味線弾きが、ここで浄瑠璃を演奏します。江戸時代後期までは、「操り浄瑠璃」または「人形浄瑠璃」と呼ばれていました。つまり浄瑠璃にあわせて演じる、操り人形芝居ということです。文楽が諸外国の人形劇と違うところは人間の微妙な心の動きを描くところです。そのために、人形の表現を多彩で豊かなものにする必要があり、一体の人形を3人で操ることによって細かな心情を表現しています。

### 三位一体の芸能

文楽の演技は浄瑠璃語り、三味線弾き、人形遣いの三者で成り立っています。

#### ※太夫

浄瑠璃を語る人のことです。いかにして浄瑠璃の内容を的確に表現し、登場人物の心を伝えるか、というのが使命です。文楽では登場人物のすべてのセリフはもちろん、その場の情景から、事件の背景までを大夫ひとりで語ります。

#### ※三味線

太棹三味線を使用します。演奏用の撥[ばち]は象牙で、厚く重いので重量感のある力強い音色を響かせます。三味線は伴奏とは違い、情景を描き出し、心情を表現する事を大切にします。

#### ※人形遣い

文楽では3名で人形を操ります。

主遣いが左手で首、右手で人形の右手を操作、左遣いが右手で人形の左手を操り、足遣いは両手で人形の両足を操ります。